

てん菜 だより

2026.2

第 15 号



発行／一般社団法人 北海道農産協会／〒060-0004 札幌市中央区北4条西1丁目 ☎011-221-2542 FAX011-221-1815
URL <https://hokkaido-nosan.or.jp>



てん菜育苗播種作業（大空町）

てんさい

令和7年産原料てん菜についても猛暑の影響を受けて、残念ながら基準糖分に達しない結果となりました。

そのような中で、今回の経営所得安定対策の見直しによる基準糖分の見直しは、生産者にとってはより北海道農業に関わる関係団体の総意であり、評価に値する結果であったと捉えています。地球温暖化が進む中、今後も引き続き基準糖分や生産費の算定が現地の感度にあった適正な評価となるように、関係団体がオール北海道として一丸となって取り組んでいくことが重要であると考えます。

また、温暖化対策は今後も重要なポイントであり、耐病性強化や高糖分型の品種の選抜がキーとなります。国内に種子及び原種の供給を行っているヨーロッパにおいても温暖化や熱波の影響を受けており、これらを克服するための品種開発が進められています。北海道農業研究センターで持つ国内の遺伝資源とヨーロッパとのジョイントも含めて、優良品種の開発を進めていくことが重要です。

一方、褐斑病を中心とした防除薬剤の使用回数増加や治療効果を持った薬剤の新規開発もキーとなります。関係団体から農薬メーカーに対して、引き続き強く働きかけをしていくことが重要です。

てん菜は北海道の大規模畑作地帯の持続可能な輪作体系を維持するために、必要不可欠な作物です。てん菜を作付けすることによって、他作物を含めた耕種的防除の効果、土壌の物理性、化学性、生物性の改善など、複合的なメリットが挙げられます。

最後に、今後も経営面積が拡大する中、様々な現地課題が出てくることも想定されます。道内の研究機関と関係団体が一体となって、安定的にてん菜が作付けできる環境や体制づくりに取り組んでいかなければならないと考えます。

H・D

令和七年産

てん菜の生産実績とその要因について

道総研北見農業試験場 研究部麦類畑作グループ 研究主幹

池谷

聡

1. はじめに

令和七年産のてん菜の受け入れは、12月30日をもって終了いたしました。全道平均の根重は66.60

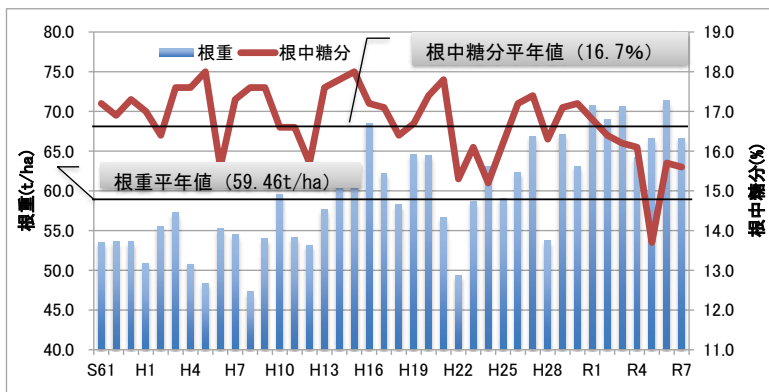


図1. 根重および根中糖分の推移（全道平均）

注1) 平均値は昭和61年～令和7年の平均

t／ヘクタールで、糖分取引の始まった昭和61年からの平年値対比では112%でやや高い値でしたが、過去最高の令和6年と比較すると5t程度低く、平成28年からの直近10年間平均と比較すると101%で平均的な値でした（図1）。根中糖分は15.6%で、昭和61年からの平年値より1.1ポイント低い値でした。令和3年より低糖分傾向が続いていますが、7年も同様に低糖分傾向でした。しかし、昭和61年に糖分取引が始まってから最も低い値となった令和5年の13.7%と比較しますと、2ポイント程度高くなっています。また令和6年と比較しますと、ほぼ同じ値でした（図1）。以上のことから、令和7年の産糖量については、令和6年より減少することが見込まれます。

表1. てん菜の生育経過（移植）

振興局	名	5月15日		6月1日	7月1日	8月1日	9月1日	10月1日	10月15日	根周平年比
		生育	移植	生育	生育	生育	生育	生育	生育	
道央・道南地域	石狩	遅7	遅7	遅5	0	遅2	早2	早3	早3	110.9%
	後志	遅1	遅3	遅1	早2	早1	遅1	遅1	遅1	97.9%
	胆振	0	遅5	0	早1	0	0	0	0	99.5%
道北地域	上川	遅1	早1	遅2	早1	遅1	0	0	0	100.7%
道東地域	オホーツク	0	遅2	0	早3	早2	早2	早2	早2	103.0%
	十勝	遅2	遅5	遅2	早2	早2	早3	早2	早2	100.2%
	全道	遅1	遅3	遅1	早3	早2	早2	早2	早2	102.7%

注1) 北海道農政部発表の「農作物の生育状況」より作成。

注2) 遅／早・数字は移植作業および生育の平年値からの遅早日数を示す。

注3) 「移植」、「生育」欄の赤字は平年値より早いこと、青字は平年値より遅いことを示す。

表2. てん菜の生育経過（直播）

振興局	名	5月15日		6月1日	7月1日	8月1日	9月1日	10月1日	10月15日	根周平年比
		出芽	播種	生育	生育	生育	生育	生育	生育	
道央・道南地域	石狩	遅6	遅5	遅4	0	遅2	早1	早1	早1	103.9%
	後志	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	胆振	遅3	遅6	遅1	早3	早1	早1	0	遅1	97.1%
道北地域	上川	遅4	遅4	0	早3	早1	遅1	遅2	遅2	97.8%
道東地域	オホーツク	遅3	遅4	遅2	早1	0	0	遅1	0	100.0%
	十勝	遅5	遅6	遅4	0	0	遅1	遅2	遅2	96.2%
	全道	遅4	遅5	遅3	早1	0	遅1	遅2	遅1	97.3%

注1) 北海道農政部発表の「農作物の生育状況」より作成。

注2) 遅／早・数字は移植作業および生育の平年値からの遅早日数を示す。

注3) 「播種」、「生育」欄の赤字は平年値より早いこと、青字は平年値より遅いことを示す。

2. 令和7年の気象と生育経過

令和7年の気象（図2）ならびに移植および直播栽培の生育経過（表1、2）を振り返ってみますと、春

先は気温が低く降水量が多かったため、移植作業や直播栽培の播種作業は全道的に遅れが出ました。移植作業は全道平均で3日、十勝、胆振、石狩地域では、5日以上遅れました。直播栽培の播種では全道平均で5日遅れました。定植・播種後は、土壌水分が確保されたため移植後の活着は順調だったと考えられます。一方で、直播の出芽は全道平均で4日遅れました。

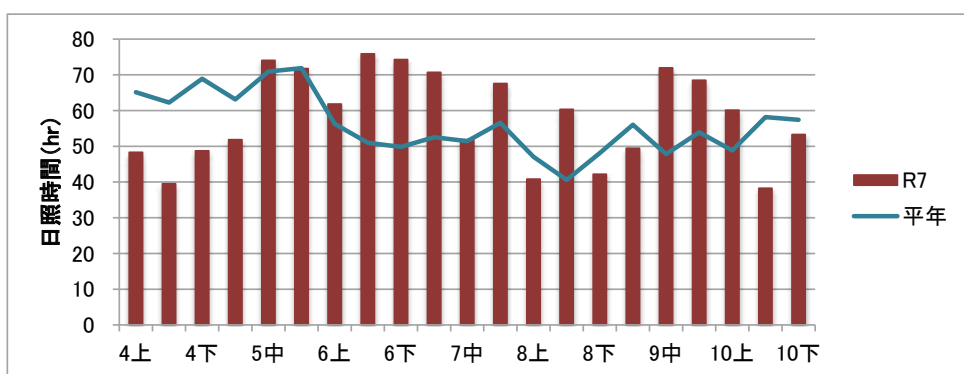
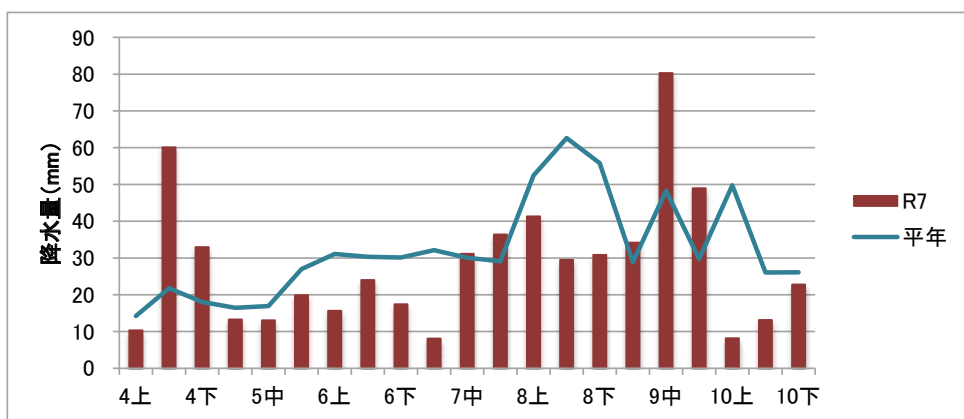
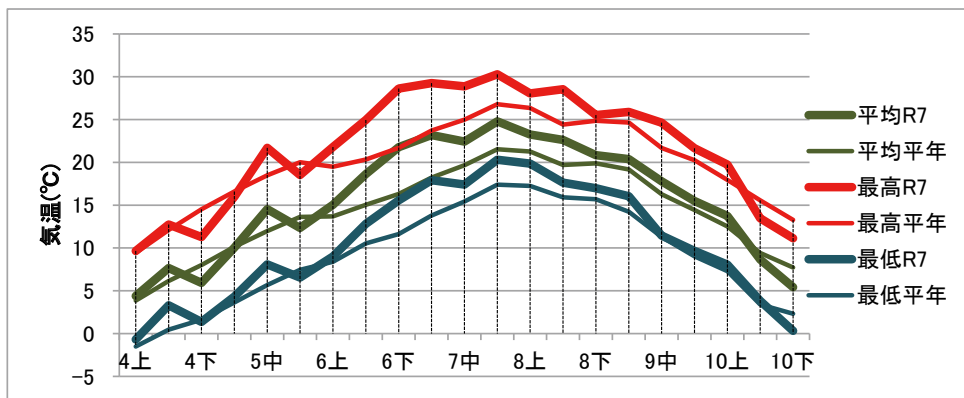


図2. 令和7年の気象経過（全道平均）

注1) 気象値は、オホーツク、十勝、上川、空知、石狩、後志、胆振地域のアメダスデータを、てん菜作付面積に基づき加重平均して算出。

注2) 平年値は平成27～令和6年の10か年平均。

その後、5月中旬より高温傾向になり、降水量も十分であったため、移植や直播栽培の播種の遅れによる生育の遅れは、解消されていきました。7月1日の生育は、移植栽培で平年より3日早く、直播栽培で1日早くなっています。しかし、7月上

旬は全道的に降雨がかなり少なく、さらに6月中旬から平均気温が5度程度平年より高くなった影響で、各地で干ばつとなり、圃場によっては下葉が黄色く枯れ上がる等の被害が出ました。7月中旬の降雨で干ばつはある程度解消しましたが、平年を

かなり上回る高温は8月中旬まで続き、降雨が十分でなかった地域では、干ばつの影響が残りました。その後は、気温が平年並みからやや高く推移し、降水量も十分であったため、移植栽培では、生育および根部の肥大が進みましたが、直播栽培では、

出芽の遅れと干ばつの影響が最後まで残り、生育は平年より遅れ気味に経過しました。

収穫期直前の10月15日の全道平均の生育の遅速は、移植で2日早く（表1）、直播で1日遅く（表2）となりました。根周の平年比の全道平均は、移植では約103%で若干大きい傾向でしたが、直播は約97%と、若干小さい傾向でした。

3. 病害虫の発生状況

令和4年から多発している褐斑病は、高温多湿条件で、発病が進展していきます。5月中旬以降の高温傾向や、令和6年の多発による感染源の増加のため、平年よりも初発が早い傾向でした。初発後も高温傾向で発病が進展しやすい状況でしたが、7月に干ばつとなった影響で、発病の進展が抑えられました。その後も干ばつの影響が残った地域では、引き続き発病の進展が抑えられました。その他の地域では、高温と断続的な降雨により、褐斑病が広がりやすい状況が続きました。結果的に令和7年も、褐斑病は多発したものの、最終的な被害面積は、令和5、6年を下回り、約8千3百ヘクタールで、

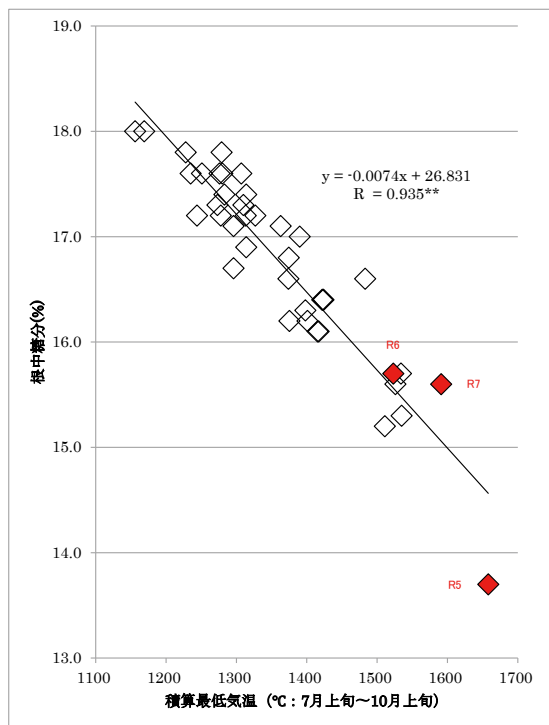


図3 夏から秋の積算最低気温と根中糖分の関係
(全道平均 昭和61年～令和7年)

注1) 積算最低気温：7月上旬～10月上旬の積算値。

注2) **: 有意水準1%で有意であることを示す。

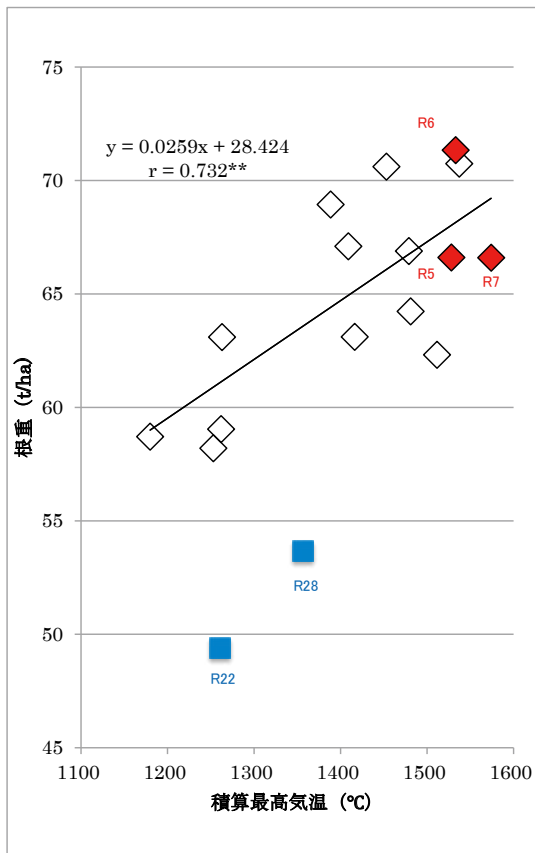


図4 春から初夏の積算最高気温と根重の関係
(全道平均 平成21年～令和7年)

注1) 積算最高気温：4月中旬～6月下旬の積算値。

注2) **: 有意水準1%で有意であることを示す。

被害面積のうち甚発生と多発生の場合、令和5年の約6千8百ヘクタール、令和6年の約2千9百ヘクタールに対して、約1千9百ヘクタールと大きく減少しました。被害面積が減った要因として、生産者の皆様が、令和5、6年以上に防除を徹底されたことと、干ばつの影響が大きかったことが考えられます。

その他の病害虫の発生については、令和7年は、6月中旬から8月中旬まで、高温が続いたことから、虫害が多発しました。ヨトウガは、2回の発生時期ともに例年よりやや早めで、1回目は例年よりやや多く、2回目は多い発生でした。また、夏

から秋口にかけて、シロオビノメイガが発生し、被害を受けた地域がありました。その他、8月から9月にかけて、シロイチモジヨトウが全道的に発生し、被害が出ました。この害虫には従来の薬剤が効きにくく、問題となりましたが、新規薬剤の活用および、気温が下がることで、沈静化しました。根腐病（黒根病を含む）は、7月中旬までの降雨が比較的少なかったことから、少発生でした。また黄化病も少発生でした。

4. 気象とてん菜生育の関係

気象と全道平均の収量の関係についてですが、まず、図3に、夏から

秋の積算最低気温と根中糖分との関係を示しました。てん菜は、この間の積算最低気温が高いほど、根中糖分が低くなる傾向があります。この理由として、夜温が高いと呼吸による糖分の消耗が大きくなるためと考えられています。また、積算最低気温が高くなると、褐斑病が多発することがあり、このことも根中糖分の低下につながります。令和7年は、9月中旬以降最低気温が平年並みになりましたが、7月から9月上旬までの最低気温が高く、この時期の影響で積算最低気温が高くなり、根中糖分が低くなったと考えられます。また、褐斑病の発生もある程度影響

したと考えられます。次に、図4に、春から初夏の積算最高気温と根重との関係を示しました。品種の根重の水準は、昭和61年からかなり向上しているため、平成21年以降のプロットとしました。また、平成22年と28年は、黒根病の多発により、根重が大きく低下した年なので、相関係数の計算からは除いています。この間の積算最高気温が高いほど、根重は多くなる傾向があります。これは、初夏までの高温が初期生育を促進させ、その後の根部肥大につながるためと考えられています。令和7年は、この間の気温が例年より高く推移したため、根重の

増加に非常に好適な条件でした。しかし、7月の高温と少雨傾向のため各地で干ばつとなった影響で、積算最高気温の値が近い令和6年等と比較すると、根重の伸びがある程度抑制されたと考えられます。

5. 令和7年のまとめ

このように、令和7年も、高温がてん菜生産に大きな影響を及ぼしました。生育においては、夏場の高温によって、根中糖分が悪影響を受けました。また褐斑病の被害は令和5、6年より減少しましたが、やはり高温の影響で、発生自体は、平年より多い傾向にありました。さらに、ヨトウガ、シロオビノメイガやシロイチモジヨトウ等の害虫の発生が増えているのも、夏場の高温に原因があると考えられます。

6. 今後の対策など

近年の地球温暖化の予測によると、今後は高温傾向が持続すると考えられています。そこで、今後に備えて注意が必要な点をいくつか挙げてみたいと思います。

令和4年から多発している褐斑病の対策についてですが、まず、でき

るだけ抵抗性が強い品種を活用することが重要です。近年、「強」よりも強い「かなり強」や「極強」の抵抗性を持つ品種が、北海道の優良品種に認定されています。「極強」品種であれば、令和5、6年のような高温多雨の気象条件でも、通常の防除体系より防除期間を短縮することが可能となります。また「かなり強」品種でも、「強」や「やや強」品種より、通常の防除体系で被害を軽減することが可能となります。

次に、防除についてですが、褐斑病がある程度広がってしまうと薬剤散布の効果が落ちてしまうので、褐斑病初発直後までに防除を開始することが非常に重要です。その後の定期的な防除では、薬剤の残効が切れて再び褐斑病が広がり始める前に、次の散布を行うことが効果的です。最も効果的な褐斑病防除薬剤であるマンゼブ剤は、残効が14日程度で銅剤などよりも長く、DMI剤やQoI剤などのような耐性菌の発生も認められておらず、連続5回散布可能なため、褐斑病防除では中心となります。通常の条件では14日間隔が散布の基本となりますが、令和5、6、7年の夏季のように、高温で急激に

発病が進む場合には残効が短くなるため、散布間隔を10日以下に短縮する必要があります。さらに、マンゼブ剤を、最も病気が激しく進展する8月中旬に重点的に散布できるように薬剤のローテーションを組むことも重要です。その他に、近年、褐斑病の新規薬剤も出てきていますので、それらを組み合わせることも、マンゼブ剤の効果を生かす上で重要だと考えられます。

褐斑病以外の要因による根中糖分の低下については、適正な施肥管理を行い、必要以上の窒素分を施肥しないことや、湿害に備えて十分な透排水対策を行うこと、さらに低糖分になりやすい圃場では、高糖分型品種を作付けすることなどの対策が重要です。近年の高糖分型品種では、糖量が、根重型品種を凌駕するものも出てきています。

令和7年は根腐病（黒根病を含む）の発生は少なかったですが、高温年で、6月から7月に降水量が多ければ、多発することが多く、多発すると根重に大きな悪影響を与えます。黒根病の対策も重要です。まず圃場の基盤整備や心土破碎など、透排水対策を十分行うことが基本で

す。その上で、抵抗性品種の作付けが効果的です。特に本病が発生しやすい圃場では、抵抗性が「強」の品種を作付けてください。直播栽培の場合は移植栽培以上に「強」品種が有効です。また、移植栽培では殺菌剤の育苗ポット灌注処理、直播栽培では7月上旬の殺菌剤株元散布も効果があります。

令和7年は、これまでほとんど見られなかったシロイチモジヨトウをはじめとする虫害が目立ちました。これらも高温で発生が増えますので、今後とも注意が必要です。

近年、病害発生がますます激しくなり、低糖分の年も頻発しています。このことに備えて、高度病害抵抗性と高糖分、高糖量を兼ね備えたてん菜品種が育成されています。今後、安定したてん菜生産のために、条件に応じてこのような品種を活用していただくことが重要です。今後とも農業試験場を含む関係機関は、有用な品種の育成に努力していくとともに、有益な情報の提供に努めて参りますので、積極的に活用していただければ幸いです。

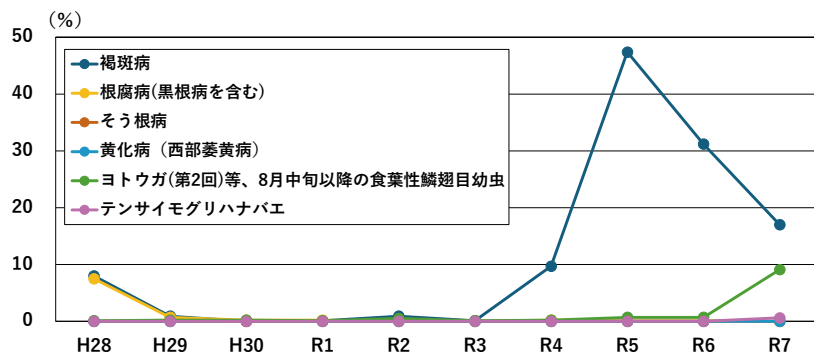


図1 てん菜の主要病害虫の年次別被害面積率（全道） 引用：農作物有害動植物発生予察事業年報

道内のでん菜栽培における、直近10年の主要病害虫の年次別被害面積率（図1）は、ほとんどの病害虫で概ね0%の推移となっています。しかし、令和5年度に多発した「褐斑病」は令和7年度も20%近い被害面積率となっており、主要な減収要因の一つとなっています。また令和6年度まではほぼ0%に抑えられていた「ヨトウガ（第2回）等」、8月中旬以降の食葉性鱗翅目幼虫」は、令和7年度に全道で10%程度の被害面積率となりましたが、これは南方から飛来したシロオビノメイガやシロイチモジヨトウといった、飛来性害虫の突発的な発生による加害が主要因となっています。今回は、近年のでん菜栽培上で発生している、これらの2病害虫について説明します。

【褐斑病】

てん菜の褐斑病は、葉に直径数mm程度の斑点を生じ、多発すると葉全体が枯死し、糖量の減収を引き起こす。

病害です。令和7年度は、令和5年度以降続く6月の記録的な高温の影響により初発時期が早まり、また7月・8月の気温もそれぞれ歴代1位・2位の高温となったことから発生量が増加して、道内全域で被害が認められました。本病の一次伝染源は前年の罹病残渣から飛散する分生子と考えられており、令和7年度も多発生だったことから令和8年度も一次伝染源は多くなると推測されます。耕種的な対応策は、連作を避け、可能な限り抵抗性の強い品種の導入が有効です。

本病による減収被害を回避するためには、遅くとも初発直後までに薬剤散布を開始する必要があります。



てん菜の褐斑病（野津原図）

本年、道央やオホーツク地方では6月下旬に初発が確認されるなど例年より初発が早かったことから、散布開始にあたっては、地域での発生や発生予察情報を参考として、計画した散布時期よりも早い時期に発病確認された場合には、直ちに薬剤散布を開始することが重要です。また、QoI剤、DMI剤、カスガマイシン剤などで耐性菌の発生が確認されているため、薬剤の選択にあたっては防除ガイドを参考として、マンゼブ剤を基幹とした防除を実施する必要があります。なお道総研農試による調査結果では、マンゼブ剤は14日の散布間隔とすると効果的な防除効果が得られることがわかりましたが、高温多湿の気象条件下では残効期間が短くなり、病勢が急激に進展する恐れがあるため、抵抗性が、やや強、以下の品種を栽培する場合は散布間隔を短くする必要があります。

【食葉性鱗翅目幼虫】

令和7年6月下旬に、長沼町に設置した予察灯にシロオビノメイガの誘殺が確認され、7月上旬には道央地域及び道南地域のでん菜圃場で本種による被害が確認されました。本種の雌はてん菜の葉裏の葉脈沿いに数粒を転々と並べて産卵して、1頭

近年のてん菜病害虫について

道総研中央農業試験場 病虫害予察診断グループ 研究主幹

三宅規文



シロイチモジヨトウ成虫 (小野寺原図)

の雌は合計80〜100粒の卵を産み付けます。ふ化直後の幼虫は表皮を残して葉肉を網目状に食害し、生育が進むと葉柄や中肋を残して食害して不規則な穴をあけます。幼虫は、尺とり状に歩行するとともに、糸を張つ



シロオビノメイガ成虫 (三宅原図)



シロイチモジヨトウ幼虫 (小野寺原図)



また、令和7年8月上旬には長沼町に設置したシロイチモジヨトウ

て葉を折り曲げその中に潜み、刺激に反応すると脚を縮めて敏速に後退して葉から落下します。ふ化後約2週間で老熟した後、地中2〜3cmの場所や枯葉の間にまゆを作つて蛹化します。



シロオビノメイガ幼虫 (三宅原図)

のフェロモントラップに多数の雄成虫が誘殺され、その後道東地域のてん菜ほ場では幼虫による加害が確認されました。本種の成虫は、体長約15mmで灰褐色、前翅には白色〜黄褐色の斑紋を持ちますが、不鮮明なことも多いです。卵は数十個が一塊となつて葉に産み付けられ、灰褐色をした成虫の鱗毛によつて薄く覆われます。幼虫の体色は淡緑色から黒紺色まで多様ですが、中齢以降は腹部側面に明瞭な白い線があることが特徴となります。老齢幼虫は体長30mm程度で、同じヤガ科のヨトウガ老齢幼虫よりも小さく見えます。

シロオビノメイガ・シロイチモジヨトウの両種とも、休眠性を持たないことから道内での露地越冬は困難とされており、令和7年度の発生は南方からの飛来によるものと考えられます。令和8年度の防除にあたつては、北海道病害虫防除所のホームページで飛来情報を確認するとともに、発生を認めた場合には速やかに殺虫剤を散布してください。ただし、両種とも複数の殺虫剤系統に感受性の低下が確認されていることから、防除にあたつては近隣の指導機関に相談する等によつて効果の高い薬剤を選択するとともに、防除実施後は効果を確認することが重要です。



【参考】ヨトウガの卵塊 (三宅原図)



シロイチモジヨトウの卵塊 (下間原図)

【令和8年度に向けて】
北海道病害虫防除所のホームページでは、ここで紹介した褐斑病や食葉性鱗翅目幼虫の他にも、道内で新たに発生した病害虫の情報や、病害虫発生予察調査による最新の発生状況、発生予測など病害虫に関する各種情報を発信しています。てん菜に限らず、各種作物を栽培するにあつては道内の病害虫発生状況を把握するためにも、定期的に確認していただければと思います。

令和7年産 てん菜生産実績（総合振興局・振興局別）

総合振興局・振興局名	作付面積 (ha)			収量 (t/ha)	生産量 (t)	平均糖分 (%)	栽培農家戸数 (戸)	1戸当り 面積(ha)
		内直播	直播率					
空 知	569.13	539.11	94.7%	70.37	40,049.34	15.0	139	4.09
石 狩	943.88	810.21	85.8%	63.80	60,223.31	15.5	123	7.67
後 志	1,071.19	641.55	59.9%	58.28	62,427.34	16.0	203	5.28
胆 振	966.44	812.33	84.1%	54.21	52,386.31	15.4	180	5.37
日 高	17.12	13.32	77.8%	63.27	1,083.18	14.7	3	5.71
渡 島	76.01	54.31	71.5%	38.64	2,937.05	13.5	16	4.75
檜 山	205.47	110.04	53.6%	38.78	7,967.63	15.6	31	6.63
上 川	2,882.36	2,268.01	78.7%	65.07	187,552.24	15.1	503	5.73
留 萌	120.05	120.05	100.0%	55.05	6,609.27	16.0	19	6.32
オホーツク	19,462.05	7,585.91	39.0%	67.15	1,306,821.98	15.8	2,041	9.54
十 勝	21,317.57	14,822.08	69.5%	67.77	1,444,673.42	15.4	2,516	8.47
釧 路	252.20	1.17	0.5%	66.42	16,750.40	15.3	14	18.01
根 室	82.02	10.08	12.3%	62.81	5,151.51	17.3	9	9.11
合 計	47,965.49	27,788.17	57.9%	66.60	3,194,632.98	15.6	5,797	8.27

.....

令和7年度てん菜の主要病害虫発生状況

病 害 虫	年次	発生面積		被害面積		発生程度別面積 (ha)					防除面積 (ha)		概 評	
		(ha)	率(%)	(ha)	率(%)	無	少	中	多	甚	実面積	延面積	初発期	発生量
褐 斑 病	R7年	38,681	80.6	8,176	17.0	9,284	30,506	6,303	1,728	144	47,965	339,428	早	多
	R6年	42,465	86.9	15,241	31.2	6,382	27,225	12,467	2,382	391	48,847	339,375	早	多
	平年	21,886	39.1	5,338	9.5	34,027	16,549	4,269	880	189				
根 腐 病 (黒根病含む)	R7年	2,876	6.0	0	0.0	45,089	2,876	0	0	0	47,770	95,824	-	少
	R6年	2,588	5.3	52	0.1	46,258	2,537	52	0	0	48,655	92,565	-	少
	平年	5,430	9.7	565	1.0	50,483	4,865	472	68	25				
そ う 根 病	R7年	51	0.1	0	0.0	47,914	51	0	0	0	0	0	-	やや少
	R6年	10	0.0	0	0.0	48,837	10	0	0	0	0	0	-	少
	平年	149	0.3	0	0.0	55,764	149	0	0	0				
黄 化 病 (西部萎黄病)	R7年	559	1.2	0	0.0	47,406	559	0	0	0	46,563	120,116	-	少
	R6年	717	1.5	0	0.0	48,130	717	0	0	0	47,637	122,609	-	少
	平年	-	-	-	-	-	-	-	-	-			-	-
ヨ ト ウ ガ (第 1 回)	R7年	9,351	19.5	495	1.0	38,614	8,855	487	9	0	47,965	83,047	やや早	やや多
	R6年	9,643	19.7	421	0.9	39,204	9,222	421	0	0	48,847	82,846	並	並
	平年	8,186	14.6	327	0.6	47,727	7,859	324	3	0				
ヨ ト ウ ガ (第 2 回)	R7年	17,392	36.3	4,385	9.1	30,572	13,008	4,231	132	22	47,965	87,586	やや早	多
	R6年	8,783	18.0	357	0.7	40,064	8,426	357	0	0	48,847	77,980	並	やや多
	平年	7,117	12.7	153	0.3	48,796	6,965	152	1	0				
テ ン サ イ モグリハナバエ	R7年	1,476	3.1	282	0.6	46,489	1,194	282	0	0	39,690	53,564	並	やや多
	R6年	446	0.9	0	0.0	48,401	446	0	0	0	47,361	73,779	並	並
	平年	197	0.4	0	0.0	55,716	197	0	0	0				

北海道病害虫防除所のまとめによる。
令和6・7年とも北海道病害虫防除所のまとめに基づき、北海道農産協会にて各面積を調整・作成
(てん菜実測面積 令和6年 48,487ha 令和7年 47,965haにて算出)
平年：平成27年～令和6年の10ヵ年平均

「スズラン印」のロゴマークをリニューアル 日本甜菜製糖株式会社

日本甜菜製糖株式会社は、

2025年10月20日より、食品ブランド「スズラン印」のブランドロゴマークをリニューアルいたしました。「スズラン印」は、時代ごとに姿を変えながら長年親しまれてきた当社の基幹ブランドであり、今回の約63年ぶりとなるリニューアルで、4代目のロゴマークとなります。

〇リニューアルの経緯

これまで当社製品のパッケージには、「スズラン印」のロゴマークを使用しているものと、異なる意匠を用いているものが混在しており、必ずしも統一性が図られていませんでした。今後、より一層消費者の皆さまに愛されるブランドを目指すため、使用する意匠を「スズラン印」に統一するとともに、ブランド戦略の一環として改めて「スズラン印」の在り方を見つめ直しました。その結果、時代の変化に適切しつつ、ブランドの想いや価値がより明確に伝わるロゴマークへ刷新することとなりました。

〇リニューアルの目的

近年、ブランドが持つストーリーそのものが付加価値となる中で、当社のDNAともいえる「スズラン印」を改めて見つめ直し、ロゴマークに明確な意味を持たせることで、より多くの方々にブランドへの共感を深めていただくことを目的としています。

また、従来の繊細なデザインから、安定感のあるデザインへと変更することで、Web媒体をはじめとする多様な使用環境においても視認性を保ち、汎用性の高いロゴマークとしました。

〇リニューアルデザインに込めた意味

当社のDNAであるスズランのモチーフを改めて見つめ直し、より躍動感のある造形へと進化させました。全体に曲線を取り入れることで、柔らかく親しみやすい印象を持たせながらも、細部の動きや線の強弱によって力強さを表現しています。

キーカラーである「ニッテンブルー」は、清廉で純粋なスズランをイメージした色であり、青く澄んだ

空や雪解けの水など、北海道の雄大な自然も想起させます。

また、「Nitten」の文字は、ドイツの英字書体「DIN」を基礎としつつ、丸みを持たせたやさしいフォルムにデザインした、ニッテンオリジナルの書体です。

当社は、新たなロゴマークとともに、今後も製品ブランドのさらなる価値向上を目指してまいります。



※各種製品のパッケージデザインも順次リニューアルしております。



お砂糖はスズラン印



シュガーセミナー インハイスクール

での取組

この取組は、全道各地の高校において砂糖に関するセミナーと調理実習を通じて、砂糖の正しい知識の普及・啓発とともにお菓子づくりの技術向上を目的としています。

今回は、応募のあった岩見沢農業高校に伺いましたので紹介させていただきます。

1. 学校紹介

岩見沢農業高校は、時代の変化に対応できる農業教育を推進するため、社会の変化や地域の実態を踏まえながら教育内容の改善を図り、農業科学科、畜産科学科、食品科学科、生活科学科、農業土木工学科、環境造園科、森林科学科の7つの学科を設置しています。

卒業生は二万三千人を超え、明治・大正・昭和・平成にわたって農業分野はもとより政治、経済、文化、行政等各界で大きな実績を



あげ、地域や同窓生の皆様に支えられながら全国有数の多学科の農業高校として活動をしています。

2. 申込の経緯

シュガーセミナーへの申込経緯を八尾教諭に伺った。

今回は食品科学科に在籍する2年生36名（男子9名・女子27名）を対象に、外部との関わりを持たせることを重視し、今後の生徒達の進路に繋げていければとの思いと、以前在籍した高校でもシュガーセミナーを経験したことや「天下糖一PJ」の取組を知っていたことから、今回申込みをしたとのこと。

3. 実際に取組んだ感想

今シュガーセミナーでは、座学と実演を基本とし、座学では砂糖の原料・てん菜についての理解とグラニュー糖と人工甘味料の食べ比べ、砂糖に関する誤解・栄養、砂糖のチカラ（働き）についての説明を行い、実演では、砂糖を使用したお菓子作りを体験することで料理への関心を深めてもらうことを目的に取組んでおります。



八尾教諭から、様々な研修・勉強会に参加させることで生徒自身に自信を持

たせることができ、食品に対する知識（今回は砂糖）を深めることができる貴重な体験となった。

生徒からも今回のセミナーは楽しくグラニュー糖と人工甘味料との違いがわかり勉強になったとか、日頃から料理やお菓子作りを実践している生徒もいる等と皆楽しく体験できる貴重な経験だったとの感想を頂いた。



令和7年度 原料てん菜 糖分測定センター 点検報告

北海道農産協会では、「原料てん菜測定要領」に基づき各製糖所等に設置されている原料てん菜糖分測定センターについて、操業開始前に立会人の立ち会いの下で実施する操業前点検、及び操業期間中にも2回実施する立入点検を実施しました。

操業前点検は9月19、24、26日に、



ディスペンサー
点検（本別）

立入点検の第1回目は10月21、23、24日、第2回目は11月7、12、14日に、それぞれの糖分測定センターにて点検を実施しました。

《点検内容》

- ・ ソウマシン ・ 薬液循環装置
- ・ ディスペンサー ・ 攪拌装置
- ・ ろ過装置 ・ 糖分測定機

《点検結果》

全道5工場・1事業所の測定装置を点検した結果、全ての測定装置が良好な状態に保たれていることを確認しました。

令和7年度 高品質てん菜づくり 講習会

北海道農産協会では、本年度の「高品質てん菜づくり講習会」を2月5日（木）に実会場とオンライン配信で開催させて頂きました。

講習会の様子は、YouTubeでも一定期間配信・公開する予定ですので、来場できなかった方、もう一度聞きたい方は、こちらよりご視聴して頂きますようお願い致します。

<https://hokkaido-nosan.or.jp/>



北海道農産協会
ホームページ